

岡村多希子著

『モラエスの旅』

ポルトガル文人外交官の生涯』

(彩流社)

本書は、これまでポルトガルの文人外交官のヴェンセスラウ・デ・モラエスの著作を数多く訳出してきた著者によるモラエスの伝記である。

一八九八年に日本に移住し神戸駐在の領事となったモラエスは、福本ヨネと同棲して幸福な生活を送ったが、一九一二年にヨネが死亡するとすべての地位を投げ捨て、ヨネの故郷徳島に移住した。徳島ではヨネの姪のコハルを下女として一緒に暮らしたが、コハルは日本人の愛人との子供を産む。コハルも間もなく病に倒れるが、モラエスは看病を続け彼女の死を看取った。コハルの子も間もなく病死する。モラエスは、ヨネとコハルを追慕しながら孤独な生活を送り、一九二九年に一人寂しく死んだ。

このようにモラエスの生涯は数奇なものだったが、重要な事実関係がはっきりとせず、「従来のモラエス伝記には、想像力の産物が事実と誤解されてくり返し孫引きさ

れ、定説のようになってしまふ、そんな一面がなきにしもあらずだった」。岡村氏は、ポルトガルと日本に存在するモラエス関係の資料を渉獵し、「判明した事実だけを資料に客観的に語らせる」という手法でモラエス伝を書き上げた。

モラエスは来日以前、海軍士官として、アフリカのモザンビークとマカオで勤務していた。アフリカ時代のモラエスがリスボンの実家の隣に住んでいた人妻イザベル（夫は病氣であった）と恋愛関係にあったことは知られていたが、本書では、イザベルが子供を産んだが死産であったことや、モラエスが他に女を作ったことがイザベルとの別離の直接の原因であることが示されている。マカオ時代、モラエスはデンマーク人と中国人女性との間に生まれた亜珍あちんという愛人を囲い、二人の子供も生まれた。しかし性格の相違から、亜珍との仲は早くに冷えていた。階級の下の方が自分の上司となる人事に怒り絶望したモラエスは、マカオを去って日本に移住することを決意するが、当初は亜珍と子供も日本へ連れて行くつもりであった。しかし、亜珍が神戸移住に関して正式な結婚を条件としたことや（当時は現地女性と正式に結婚することは考

えられなかった）、日本で中国語しか話せない中国女性と暮らすことは領事という職務上困難なことから、結果として亜珍と子供をマカオに「棄てる」ことになり、モラエスは単身で来日した。

領事辞任の理由も、母国ポルトガルでの政変の最中に生じた給与送金の途絶が、モラエスの自尊心をひどく傷つけたからだ」と記されている。日本に関する著述で名をなしていたモラエスは日本を去ることはできなかつた。愛するヨネを失った悲嘆の念も彼を日本に留めた。コハルの死後、モラエスはコハルの妹、マルエにも求婚した（マルエは同意しなかつた）。このため、モラエスは好色との批判も為されたが、岡村氏はこれは亜珍との結婚（亜珍は来日して結婚を迫った）を回避するための手段であったのだと記している。

本書は、これまでのモラエス像を修正する数多くの事実が提示されており、モラエス研究史上画期的である。

(中山和芳)